

〈論文〉

育児期の母親固有の友人関係（ママ友関係）に関する 予備的研究

西 中 華 子

キーワード

ママ友 成人期 育児期 友人関係 育児満足感 育児支援

問題と目的

近年育児サポートや育児不安に関する研究が数多く行われているが、それらにおけるソーシャルサポートの担い手として、ママ友が含まれることが明らかにされている（大峯ら、2020；井梅、2024 など）。例えば大峯ら（2020）は乳児をもつ母親の孤独感に関連する要因について実証的に検討し、夫や両親からよりも、ママ友からのソーシャルサポートが、乳児の母親の孤独感を防御することを明らかにしている。また井梅（2024）は小学生をもつ母親の育児における困り感について検討し、ママ友からサポートを得られているほど、育児における疲労感が低くなることを示唆している。加えて夫からのサポートについても検討し、ママ友からのサポートと夫からのサポートは同程度に育児疲労感と関連を示すことを明らかにしている。これらの先行研究からも、ママ友が育児期の母親にとって重要なサポート源であることが明らかにされているが、ママ友がソーシャルサポート源となる固有の特質とはどのようなものがあるのだろうか。

そもそもママ友とは子どもを通じて知り合った母親同士のことであり（大嶽、2017）、子ども同士の関係性が第一義的であるにもかかわらず、母親同士が「友人関係」とされる特異な関係性であるとされている（中山、2012）。青年期までの友人関係は、児童期のギャングに始まり、チャム、ピアと成熟していくことが明らかにされており（保坂・岡村、1992）、その様相についての心理学研究も数多くなされている。一方でママ友関係が形成される成人初期やそれ以降の友人関係についての研究は必ずしも多くない。例えばErikson（1959）の漸性発達理論における成人初期の心理社会的課題は「親密性 vs 孤立」であり、課題を達成していく上での重要な対人関係は異性、すなわち夫婦関係を始めとした異性関係（パートナー関係）が想定されている。現代においても、育児やサポートの担い手として父親である夫は当然重要な存在であるが、現代女性の多くが抱える、育児についての悩みや、それに伴う仕事の継続や中断、再開についての葛藤を共有できる相手として、同じ体験をもつ同世代の同性の友

人の存在は大きいと想像され（藤井，2016），その形成過程や維持について明らかにする意義は大きいと考えられる。

ではママ友の特質とはどのようなものであろうか。藤井（2016）も指摘する通り，成人初期以降の友人関係は，青年期までの友人関係とは異なり，ライフコースの違いによって生じた生活環境，すなわち仕事や子どもの有無などが，話題の共通性や時間の共有のしやすさに大きく影響すると考えられる。つまりママ友関係は，青年期までの友人関係が本人自身の経験や環境のなかから主体的に選択し，構築していたのとは質的に異なり（宮木，2004），時間や話題の共通性をきっかけに形成される関係であるといえる。加えてママ友関係とは母親にとって，情報共有などの物理的な有用性に加え，互いに感情を交流し合う情緒的な有用性をもつが，一方で子ども同士の関係性を第一義とする関係性であることから，子ども同士の関係性に否定的な影響を及ぼすことを恐れ，葛藤が生じやすいとされている（實川・砂上，2009）。つまりママ友関係は母親同士の関係と子ども同士の関係が並行的に交錯することから（藤井，2016），良好な関係性の構築や継続が必ずしも母親の意志や努力のみでコントロールできず，それによりその存在がサポート源でありながらストレスの源ともなる両価性をもつ（藤井，2016）という特質をはらむと推察される。実際に工藤（2013）は，ママ友同士はお互いに悩みを共有したり，相談したりすることで，育児ストレスが解消されるとしている。一方で，ママ友関係はその関係を維持する中でストレスを感じさせられるという知見や（河村，2016），深刻な社交不安症を引き起こした事例も報告されており（松本ら，2021），ママ友関係の両価性が実証的にも明らかにされている。また實川・砂上（2013）によると，専業主婦の母親は，ママ友との人間関係を「個としての自分」と「親役割の自分」それぞれとの同質感及び親しさの度合いから，分類して捉えていることを明らかにしている。なおここでは，母親は上述の「個としての自分」と「親役割の自分」との間で葛藤し揺れ動きながら育児期を過ごすとされており，ママ友付き合いの難しさは，この2つの自己観の揺らぎに起因するものであると結論づけられている（實川・砂上，2013）。大嶽（2017）はママ友グループの特徴について尺度を用いて実証的に研究し，メンバー以外の人を仲間に入れないという雰囲気を示す「閉鎖性」，ママ友グループにおける所謂ボスママやカーストを示唆する「階層性」，グループメンバー同士の親密さを示す「親和性」の3因子から捉えている。加えて大嶽は個人のママ友グループに対する関わり方についても検証を行い，周囲から浮いてしまうことを懸念する「評価懸念」，グループメンバーへの信頼を表す「信頼安心」，メンバーから嫌われることを恐れる「拒否不安」，メンバーと何でも同じでいたいという「同調志向」の4因子を抽出している。その上でママ友グループの特徴と関わり方についての関連を検討し，グループ内の「閉鎖性」が高いほど「信頼安心」が低く，「拒否不安」や「同調志向」の高い関わり方をしていること，及び「階層性」の高いグループに所属している人ほど，「不安と同調」や「同調志向」の高い関わりをしていることを実証的に明らかにしている。他方で，たとえグルー

ブ内の「親和性」が高い場合でも、「評価懸念」、「信頼安心」、「同調志向」の高い関わりをすることも示唆されている。青年期の女子の友人関係に関する研究において（石本ら，2010），中学生の段階では，心理的距離¹⁾と同調性が共に高い密着した友人関係をとる場合，学校適応は適応的であるものの心理的適応は不適応的であることが報告されている。ところが高校生段階に入ると，心理的距離は近くとも同調的でない友人関係をもつことが，心理的適応にとって重要であることが明らかにされており，女子の友人関係における発達の変化が明らかにされている。これまで概観してきた通り，ママ友関係とは同質性を契機に形成される関係性であり，そのため同調性を生みやすく，その同調性の高まりと共に親密さを深めるものと考えられる。一方で同調性によって結びついた友人関係は，青年期後期の段階において既に心理的な不適応を生む危険性を指摘されていることから，成人期段階においても同様のことが危惧される。つまり同調性で結びつくママ友関係という関係性そのものが，適応的に維持しづらいものであることが推察される。

上述してきたように，ママ友関係は良好な関係性の維持が難しい関係であると言えるであろう。しかし本来ヒトの母親とは共同養育を行う存在であったにもかかわらず（NHK スペシャル取材班，2016），近年の核家族化，地域との関わりが希薄化した育児環境において（塩塚，2022），青年期から続く友人との関係がライフコースの枝分かれによって失われていく中（實川，2010），同じような立場から，同じような悩みをリアルタイムに共有し，共感し合える仲間を求めているのではないだろうか。夫とは，性別から生じるキャリア形成やライフコースのギャップを感じ，親世代とは時代によるギャップが生じることから，共有できない悩みがあると想像される。またフォーマルなサポートでは得られない，対等な関係性の実感や純粋な友情とったものも求められているのかもしれない。ママ友同士は，性別や世代，立場といったギャップが少ない者同士で関係を形成し，お互いを重要な存在と認識するのではないかと想定される。

以上より育児期の母親固有の友人関係であるママ友関係を適応的に維持するための示唆を得ることは，現代の過酷な育児環境の中で子を育てる母親への，支援の可能性を拡大するものと考えられる。そこで本研究では，育児期の母親固有の友人関係であるママ友関係についての検討を行う。具体的に本稿では基礎的・予備的研究の段階として，一般的にママ友関係に影響を及ぼすと考えられている母子の基本属性や世帯の基本属性，子ども同士や母親同士のかかわり方がママ友関係とどのように関連するのか，さらにママ友関係が母親の育児感情にどのように関わるのかを検討し，ママ友研究の基礎的資料を報告することを目的とする。

方 法

1. 調査対象者 0歳から10歳（小学校3年生）までの，発達の遅れを指摘されたことがない子²⁾を持つ母親，800名から調査協力を得た。なお，本研究では広く一般的なママ友関係

について検討を行うために、調査対象者を専業主婦やその他の職業に限定せずリクルートしている。

2. 調査時期 2021 年 10 月中旬に実施した。

3. 調査手続 調査会社（楽天インサイト）を通じて、インターネット経由で行われた³⁾。

4. 調査内容

1) フェイスシート：母子の基本属性（母親の年齢、子どもの人数、回答対象となる（以下、略）子どもの年齢、子どもの性別、子どもは第何子か、子どもが幼稚園と保育園のどちらに通っているか（通っていたか）、幼稚園・保育園は公立か私立か）、世帯の基本属性（世帯年収、現在の居住地が親の出身地かどうか）について尋ねた。

2) ママ友の基本要素

(1) ママ友の有無：ママ友の有無を尋ねた。教示文は「ママ友はいますか」であり、調査対象者が思い浮かべる人物を自由に想定してもらう形式とした。評定は「1. いる」「2. いない」の 2 件法であった。

(2) ママ友の人数：ママ友の人数について、自由記述で回答をもとめた。

(3) ママ友関係

①ママ友必要感：ママ友を必要であると考えているかどうかを尋ねた。評定は「1. 必要でない」から「5. 必要である」の 5 件法であった。

②ママ友との関係継続意志：今後もママ友との付き合いを継続したいかどうかを尋ねた。評定は「1. あてはまらない」から「5. とてもあてはまる」の 5 件法であった。

③ママ友との関係性：大嶽（2017）のママ友グループの関わり方尺度（22 項目）を用いた。評定は「1. まったくあてはまらない」から「5. とてもあてはまる」の 5 件法であった。

(4) 子ども同士の親密性：子ども同士の仲の良さの程度について尋ねた。評定「1. 全く仲が良くない」から「5. とても仲が良い」までの 5 件法であった。

(5) 親子同士が会う頻度：親子同士が会う頻度について尋ねた。評定は「1. 月に 1 度以下」から「5. 毎日」までの 5 件法であった。

(6) 母親の育児感情：吉田ら（2013）の育児不安尺度より「育児満足」（7 項目）を用いた。評定は「1. 全くそう思わない」から「4. よくそう思う」の 4 件法であった。

5. 倫理的配慮

参加者には、研究目的、方法、参加は自由意志で拒否による不利益はないこと及び個人情報保護などについてアンケートの教示において説明を行い、すべての項目において同意を得た上で回答を求めた。また本研究は姫路獨協大学・生命倫理委員会の承認を得ている。

結果と考察

1. ママ友との関係性の因子構造

Table1. ママ友との関係性の因子分析結果

項目	F1	F2
F1: 不安と同調 ($\alpha = .88$)		
11. ママ友（グループのみんな）から嫌われるのではないかと、ビクビクしている	.83	-.24
18. 自分がママ友（グループのみんな）から嫌われていないか気になる	.82	-.10
12. ママ友（グループのみんな）の顔色ばかり伺っている	.79	-.19
19. 自分がママ友（グループのみんな）からどのように思われているか気になる	.73	.02
22. あまりやりたくないことでも、ママ友（グループのみんな）に合わせようと思う	.63	.01
17. ママ友（グループのみんな）と意見を合わせようとしている	.63	.07
10. 何をするにもママ友（グループのみんな）と一緒にだと安心する	.58	.27
14. ママ友（グループ）から仲間外れにされるのは絶対に嫌だ	.56	.35
5. ママ友（グループのみんな）は、私とあまり一緒にいたくないのではと感じる	.51	-.35
6. ママ友（グループのみんな）となんでも同じでいたい	.50	.25
3. 一人でいるのはなんだか心細い	.44	.25
F2: 信頼安心 ($\alpha = .87$)		
15. ママ友（グループのみんな）のことを信用している	.06	.77
16. ママ友（グループの人）になら、何でも打ち明けられる	.06	.77
4. ママ友（グループのみんな）には、自分のありのままの姿を見せられる	-.08	.75
20. ママ友（グループのみんな）とうまくやっていけると思う	-.08	.71
13. ママ友（グループのみんな）は私を裏切らないと思う	.14	.70
7. ママ友（グループのみんな）は、私になら何でも打ち明けてくれると思う	.12	.65
8. ママ友（グループのみんな）と意見が違っても、自分の意見を言える	-.27	.52

累積寄与率48.66%/因子間相関.13

ママ友との関係性の因子構造を確認するために、ママ友グループの関わり方尺度全 22 項目について因子分析（主因子法・Promax 回転）を行い、2 因子を抽出した（Table1）。第 1 因子は、先行研究（大嶽，2017）における「拒否不安」「同調志向」「評価懸念」の項目が混在しており、ママ友から嫌われることを恐れ、やむを得ず同調することを表す項目に高い負荷を示したことから「不安と同調」とした。第 2 因子は、ママ友を信頼でき、ママ友とうまく付き合えているといった意味内容を表していることから、大嶽（2017）に倣い、「信頼安心」とした。累積寄与率は 48.7% であった。「不安と同調」「信頼安心」それぞれについて α 係数を算出したところ、「不安と同調」で .88, 「信頼安心」で .87 とそれぞれ高い値が得られ、内的整合性が確認された。

2. ママ友の人数とママ友関係の関連

ママ友の人数と、ママ友関係との関連を検討するために、ママ友の人数とママ友必要感、

関係継続意志、ママ友との関係性（不安と同調・信頼安心）との相関分析を行った（Table2）。その結果、ママ友の人数とママ友必要感、関係継続意志、信頼安心との間に、低い値ではあるものの有意な負の相関が認められた（ママ友必要感： $r = -.200^{***}$ 、関係継続意志： $r = -.134^{**}$ 、信頼安心： $r = -.166^{**}$ ）。以上のことから、ママ友の人数が多いほどママ友が必要だとは思わず、関係を続けていきたいとも感じておらず、信頼関係も希薄となりやすいことが示唆された。

3. ママ友要素同士の関連

ママ友必要感と関係継続意志、ママ友との関係性（不安と同調・信頼安心）との相関分析を行った（Table2）。その結果、ママ友必要感と関係継続意志との間に有意な高い正の相関が（ $r = .849^{**}$ ）、不安と同調との間に有意な低い正の相関が（ $r = .248^{**}$ ）、信頼安心との間に有意な中程度の正の相関が（ $r = .624^{**}$ ）認められた。関係継続意志と不安と同調との間にごく低いながらも有意な正の相関が（ $r = .187^{***}$ ）、信頼安心との間に有意な中程度の正の相関が（ $r = .626^{**}$ ）みられた。これらより、ママ友が必要であると感じている母親ほど、関係を継続したいと考えながらも拒否されることを恐れ同調していることが、さらにママ友に信頼をおいているほど関係を継続したいと考える一方で拒否されることを恐れ同調することが明らかにされた。

Table2. ママ友必要感と関係継続意志、ママ友との関係性得点の相関係数

	ママ友必要感	関係継続意志	ママ友との関係性	
			「不安と同調」	「信頼安心」
ママ友の人数	-.200 ***	-.134 **	-.033	-.166 ***
ママ友必要感	—	.849 ***	.248 ***	.624 ***
関係継続意志	—	—	.187 ***	.626 ***

** $p < .01$, *** $p < .001$

4. ママ友関係と育児感情の関連

ママ友の有無によって育児感情の平均値が異なるのかについて検証するために、ママ友の有無を独立変数、育児満足感を従属変数とする t 検定を行った（Table3）。その結果、有意な差が認められ、ママ友がいないほうが、育児満足感が高いことが明らかにされた（ $t(248) = 5.78$, $p = .000$, $d = .56$ ）。加えてママ友との関係性（不安と同調・信頼安心）と育児満足度との相関分析を行った結果（Table4）、信頼安心と育児満足度との間に有意な低い正の相関が認められ（ $r = .232^{**}$ ）、ママ友と心理的なつながりをもて、良好な関係を築いているほど、育児満足度が高くなることが示された。

Table3. ママ友の有無別，育児満足感得点の平均値の比較

		ママ友あり (<i>N</i> =605)	ママ友なし (<i>N</i> =180)	<i>t</i> 値
育児満足感	<i>M</i>	1.45	1.75	5.78 ***
	(<i>SD</i>)	(.50)	(.64)	

*** $p < .001$

Table4. ママ友の人数，ママ友との関係性と育児満足感との相関係数

	ママ友の人数	ママ友との関係性	
		「不安と同調」	「信頼安心」
育児満足感	-.099 *	-.027	.232 ***

* $p < .05$, *** $p < .001$

5. 母子の基本属性とママ友要素との関連

1) 母親の年齢，子どもの年齢，子どもの性別とママ友関係の関連

ママ友の有無によって母親の年齢及び子どもの年齢の平均値が異なるかを検討するために，ママ友の有無を独立変数，母親及び子どもの年齢を従属変数とした *t* 検定を行った (Table5)。すると効果量は低いものの子どもの年齢において有意な差が認められ，子の年齢が高い場合ほど，ママ友を有していることが示唆された (母親： $t(783) = 1.59$, $p = .111$, $d = .14$ ，子ども： $t(783) = 3.80$, $p = .000$, $d = .32$)。また，母子の年齢とママ友の人数との関連について相関分析を行った結果 (Table6)，子の年齢との間に弱い正の相関がみられ ($r = .102^*$)，子の年齢が高いほど，ママ友の人数が多くなることが示唆された。これらは単純に子の年齢が上がるほど子育てに従事している期間が長くなるため，ママ友関係形成の機会が多くなるためであると考えられる。次に母子の年齢とママ友必要感，関係継続意志，ママ友との関係性（不安と同調，信頼安心）との相関を検討した。その結果，母子の年齢とママ友必要感，関係継続意志，ママ友との関係性との間には関連が認められなかった。これらのことから，母子の年齢は直接的にママ友との関係性と関連しないことが示唆された。

Table5. ママ友の有無別，母子の年齢の平均値の比較

		ママ友あり (<i>N</i> =605)	ママ友なし (<i>N</i> =180)	<i>t</i> 値
母親年齢	<i>M</i>	37.20	36.43	1.59
	(<i>SD</i>)	(5.66)	(5.51)	
子ども年齢	<i>M</i>	6.05	5.18	3.80 ***
	(<i>SD</i>)	(2.66)	(2.80)	

*** $p < .001$

Table6. ママ友必要感, 関係継続意志, ママ友との関係性得点の母子の年齢との相関係数

	ママ友の人数	ママ友必要感	関係継続意志	ママ友との関係性	
				「不安と同調」	「信頼安心」
母親の年齢	-.053	-.065	-.067	.043	.009
子どもの年齢	.102 *	-.099 **	-.095 **	.009	.002

* $p < .05$, ** $p < .01$

さらに子どもの性別とママ友の有無との関連を検討するために、 χ^2 検定を行った。その結果有意な差はみられなかった。加えて子の性別を独立変数, ママ友の数を従属変数とした t 検定を行った結果, こちらも差が見られず, 子の性別とママ友の有無及びママ友の人数とは関連がないことが示された。子の性別によってママ友関係得点が異なるかを検討するために, 子の性別を独立変数, ママ友必要感, 関係継続意志, ママ友との関係性 (不安と同調・信頼安心) 得点を従属変数とした t 検定を行った。その結果, すべてにおいて有意な差はみられず, 子の性別はママ友との関係性に関連しないことが明らかにされた。

2) 子どもの人数及び出生順位と, ママ友関係との関連

ママ友の有無によって子どもの人数の平均値が異なるのかを検討するため, ママ友の有無を独立変数, 子どもの人数を従属変数とした t 検定を行った (Table7)。その結果効果量はやや低いものの有意な差が認められ, ママ友がいる母親の方が, ママ友がいない母親よりも子どもの人数が多いことが示唆された ($t(783) = 3.564$, $p = .000$, $d = .31$)。また子どもの人数とママ友の人数について相関分析を行った結果 (Table8), 低い値ではあるものの有意な正の相関がみられ, 子どもの人数が多いほどママ友の人数が多くなることが明らかにされた ($r = .134^{**}$)。これらの結果は, 子どもの人数が増えるほど他の子どもの保護者と会う機会も増えるため, 必然的にママ友関係を形成する機会が増えることが要因であると推定される。さらに子どもの数とママ友必要感, 関係継続意志, ママ友との関係性 (不安と同調・信頼安心) との相関を検討した結果, いずれも相関は認められず, 子どもの人数が多いこととママ友と良好な関係性を築いていることは関連しないことが示唆された。

Table7. ママ友の有無別, 子の人数の平均値の比較

		ママ友あり ($N=605$)	ママ友なし ($N=180$)	t 値
子どもの人数	M (SD)	1.72 (.76)	1.49 (.69)	3.564***

*** $p < .001$

Table8. ママ友必要感、関係継続意志、ママ友との関係性得点と、子の人数との相関係数

	ママ友の人数	ママ友必要感	関係継続意志	ママ友との関係性	
				「不安と同調」	「信頼安心」
子どもの人数	.134 **	-.049	-.044	.038	-.016

** $p < .01$

また、ママ友の有無で出生順位の分布中心（中央値）に差があるかを検証するため、Mann-Whitney の U 検定を行ったところ（Table9）、ママ友がいる母親の子どもは、0.1%水準で出生順が遅いことが示された（ $U = 47688.5$, $p = .000$, $r = .12$ ）。加えて出生順位によってママ友の人数に差があるかを検証するために、出生順位を要因とした一元配置分散分析を行った。その結果、有意な主効果は認められず、出生順位とママ友の人数とは関連しないことが明らかにされた。さらに出生順位を独立変数とし、ママ友必要感、関係継続意志、ママ友との関係性（信頼安心・不安と同調）を従属変数とした一元配置分散分析を行った結果、これらすべてにおいても有意な主効果は認められなかった。この結果についても上述同様、出生順が遅いということは、母親が回答対象となった子どもの兄や姉の育児期にもママ友関係を形成する機会があり、このことから出生順が遅いほどママ友がいる場合が多くなると推察される。一方でママ友の人数やママ友との関係性とは関連がみられなかったことから、単なる出生順に伴う必然的な他の保護者との出会いが、ママ友と良好な関係を築く要因とはなり得ないことが明らかにされた。

Table9. ママ友の有無別、出生順位得点の比較

	N	出生順位中央値 (パーセンタイル範囲)	p 値
ママ友あり	605	1.00 (0~70)	
ママ友なし	180	1.00 (0~80)	< .001
合計	785	1.00 (0~75)	

3) 幼稚園・保育園どちらの出身であるかと、ママ友関係の関連

子どもが幼稚園に通っているか、保育園に通っているか（以下、幼・保）⁴⁾（小学生の場合は、どちら出身であるか）と、ママ友の有無との関連について、 χ^2 検定を行った（Table10）。その結果有意な差がみられ、子どもが幼稚園に通っている母親の方がママ友を得ている場合が多く、子どもが保育園に通っている母親の方がママ友を得られていない場合が多いことが明らかにされた（ $\chi^2 (1, N = 540) = 4.885$, $p = .027$, $\phi = .095$ ）。さらに幼・保によってママ友の人数に差があるのかを検証するため、幼・保を独立変数、ママ友の数を従属変数とした t 検定を行ったが、有意な差はみられなかった。加えて幼・保とママ友関係の関連を検討す

るために、幼・保を独立変数、ママ友必要感、関係継続意志、ママ友との関係性（不安と同調・信頼安心）それぞれを従属変数とした t 検定を行った（Table11）。その結果、効果量は低いものの、ママ友必要感と関係継続意志に有意な差がみられ、幼稚園の母親よりも保育園の母親の方がママ友を必要としており（ママ友必要感： $t(514) = 2.37$, $p = .018$, $d = .20$ ）、ママ友付き合いを継続させたいと感じていることが示唆された（関係継続意志： $t(515) = 2.504$, $p = .013$, $d = .22$ ）。一方でママ友との関係性については幼・保で差がみられなかった。

Table10. 幼保別による、ママ友の有無の比較

	ママ友あり $N(\%)$	ママ友なし $N(\%)$	p 値
幼稚園	252(57.7)	47(45.6)	$p < .05$
保育園	185(42.3)	56(54.4)	
合計	437(80.9)	103(19.1)	

Table11. 幼保別、ママ友の人数、ママ友必要感、関係継続意志、ママ友との関係性得点の比較

		幼稚園	保育園	<i>t</i> 値
ママ友の人数	<i>M</i>	5.78	5.64	.214
	(<i>SD</i>)	(4.39)	(8.33)	
ママ友必要感	<i>M</i>	2.30	2.52	2.37 *
	(<i>SD</i>)	(1.08)	(1.08)	
関係継続意志	<i>M</i>	2.14	2.37	2.50 *
	(<i>SD</i>)	(1.04)	(1.04)	
＜ママ友との関係性＞				
「不安と同調」	<i>M</i>	3.52	3.55	.456
	(<i>SD</i>)	(.64)	(.73)	
「信頼安心」	<i>M</i>	3.03	3.11	1.25
	(<i>SD</i>)	(.75)	(.72)	

* $p < .05$

4) 子どもの通う園が公立であるか私立であるかと、ママ友関係の関連

子どもが通っている幼稚園あるいは保育園が公立であるか私立であるか（以下、公・私）と、ママ友の有無の関連について χ^2 検定を行ったが、有意な差はみられなかった。さらに公・私によってママ友の人数及びママ友関係に差がみられるのかを検証するため、公・私を独立変数、ママ友の人数、ママ友必要感、関係継続意志、ママ友との関係性（不安と同調・信頼安心）を従属変数とした t 検定を行った（Table12）。その結果、ママ友必要感と関係継続意志において効果量は低いが有意な差がみられ、公立の園に子どもが通う母親の方が、私立の園に子どもが通う母親より、ママ友を必要だと感じており、今後もママ友関係を続けたいと感じていると示唆された（ママ友必要感： $t(523) = 2.413$, $p = .016$, $d = .22$ 、関係継続意志： $t(313) = 2.334$, $p = .020$, $d = .23$ ）。他方ママ友との関係性については上述の幼・保同様、公・私で差がみられなかった。

Table12. 園の公立私立別、ママ友の人数、ママ友必要感、関係継続意志、ママ友との関係性得点の比較

		公立	私立	<i>t</i> 値
ママ友の人数	<i>M</i>	6.55	5.33	1.40
	(<i>SD</i>)	(9.54)	(4.23)	
ママ友必要感	<i>M</i>	2.56	2.32	2.41 *
	(<i>SD</i>)	(1.15)	(1.05)	
関係継続意志	<i>M</i>	2.40	2.16	2.33 *
	(<i>SD</i>)	(1.11)	(1.01)	
＜ママ友との関係性＞				
「不安と同調」	<i>M</i>	3.50	3.55	.71
	(<i>SD</i>)	(.72)	(.66)	
「信頼安心」	<i>M</i>	3.14	3.03	1.51
	(<i>SD</i>)	(.76)	(.73)	

* $p < .05$

6. 世帯の基本属性とママ友関係の関連

1) 世帯年収とママ友関係の関連

ママ友の有無により世帯年収の平均値が異なるのかを検討するために、ママ友の有無を独立変数、年収を従属変数とする t 検定を行った (Table13)。その結果効果量はやや低いものの有意な差がみられ、ママ友がいる母親群の方が、ママ友がいない母親群よりも、世帯年収の平均値が高いことが示唆された ($t(284) = 2.743, p = .005, d = .40$)。加えて、世帯年収によってママ友の人数やママ友関係の平均値が異なる可能性について検証するために、世帯年収を独立変数、ママ友の人数、ママ友必要感、関係継続意志、ママ友との関係性（不安と同調・信頼安心）得点を従属変数とする一元配置分散分析を行った。その結果、ママ友必要感と関係継続意志において主効果が有意であったものの、効果量はなしであった（ママ友必要感: $F(9, 790) = 1.98, p = .005, \eta^2 = .000$, 関係継続意志: $F(9, 790) = 9.141, p = .039, \eta^2 = .000$ ）。

Table13. ママ友の有無別、世帯年収の比較

		ママ友あり (<i>N</i> =605)	ママ友なし (<i>N</i> =180)	<i>t</i> 値
世帯年収	<i>M</i>	6.15	5.14	2.81 **
	(<i>SD</i>)	(2.52)	(2.64)	

** $p < .01$

2) 居住地が両親の出身地か否かと、ママ友関係の関連

居住地が両親どちらかの出身地か否か（母の出身地、父の出身地、両親の出身地、どちらでもない）と、ママ友の有無に関連があるかを検討するため、 χ^2 検定を行った (Table14)。その結果、 $\chi^2(4, N = 785) = 10.443, p = .034, \phi = .115$ で有意な関連が認められた。残差分

析の結果、居住地が父母どちらもの出身地であるときにママ友がいる場合が多く、ママ友がいない場合が少ないことが、居住地がどちらの出身地でもないとき、ママ友がいる場合が少なく、ママ友がいない場合が多いことが示された。加えて居住地が両親の出身地か否かによって、ママ友の数、ママ友関係の平均値に差がみられるかを検討するために、居住地を独立変数、ママ友の数、ママ友必要感、関係継続意志、ママ友との関係性（不安と同調・信頼安心）得点を従属変数とした、一元配置分散分析を行ったが、有意な主効果はみられなかった。居住地が両親の出身地である場合、顔見知りが多いことが想定され、それがママ友関係形成のきっかけとなるのではないかと考えられる。しかしながらそれがママ友の数や関係の良好さには関係しないことから、あくまできっかけとなる程度であり、親密な関係性を形成する要因とはならないことが推察される。

Table14. 世帯の居住地別による、ママ友の有無の比較

	ママ友あり N (%)	ママ友なし N (%)	p 値
母の出身地	163 (20.76)	49 (6.24)	$p < .05$
父の出身地	126 (16.05)	29 (3.69)	
両親の出身地	167 (21.27)	48 (6.11)	
どちらでもない	141 (17.96)	45 (5.73)	
その他	8 (1.02)	9 (1.15)	
合計	605 (77.07)	180 (22.93)	

7. 親子同士のかかわり方とママ友との関係性の関連

子ども同士の親密さの程度とママ友関係との関連を検証するために、子ども同士の親密性とママ友必要感、関係継続意志、ママ友との関係性（不安と同調・信頼安心）との相関分析を行った（Table15）。その結果、子ども同士の親密性と不安と同調との間に有意な低い負の相関がみられ（ $r = -.137^{**}$ ）、子ども同士の仲が良いほど、母親はママ友に嫌われるのを恐れることが示唆された。次に親子同士が会う頻度とママ友必要感、関係継続意志、ママ友との関係性との相関分析を行った結果、関連は認められなかった。このことから、親子同士が頻繁に会っているからといって、必ずしも良好な関係性が築かれているとは限らないことが明らかにされた。

Table15. 子ども同士の親密さ、親子同士が会う頻度とママ友関係の相関係数

	ママ友必要感	関係継続意志	ママ友との関係性	
			「不安と同調」	「信頼安心」
子ども同士の親密性	.055	.051	-.137 **	.079
子ども同士が会う頻度	.068	.095 *	.044	.085
母親同士が会う頻度	.029	.024	.004	.030

* $p < .05$, ** $p < .01$

まとめと今後の課題

本研究では育児期の母親固有の友人関係に関する予備的研究として、ママ友の有無や人数、ママ友必要感、ママ友関係継続意志や、母親と子どもの基本情報、ママ友関係とがどのように関連しているのかについて検討を行った。

1. ママ友要素同士の関連及びママ友要素と育児満足感の関連について

まずママ友の有無や人数、ママ友必要感、関係継続意志と、ママ友との関係性の関連について検討した。その結果、ママ友が必要であると感じている母親ほど、関係を継続したいと考えながらも拒否されることを恐れ同調していることが、加えてママ友に信頼をおいているほど関係を継続したいと考える一方で、拒否されることを恐れ同調することが明らかにされた。さらに、ママ友の人数が多いほどママ友が必要だとは思わず、関係を続けていきたいとも感じておらず、信頼関係も希薄となりやすいことが示唆された。次にママ友の有無及び人数、ママ友との関係性と育児満足度との関連について検討を行った結果、ママ友がいないほうが育児満足感が高いことが明らかにされた。さらにママ友との関係性と育児満足度との分析を行った結果、ママ友を信頼し良好な関係を築いているほど、育児満足度が高くなることが示された。先行研究においてもママ友関係がサポート源でありながらストレス源ともなるという両価性が指摘されているが（藤井，2016）、本研究の結果においてもその両価性が示された。一方でママ友の人数が多いほどママ友1人1人との関係性が希薄である様子が示唆されたが、これについてはそもそも青年期までの友人関係やアタッチメント、その他パーソナリティといった要因が影響しているのかについて、今後検証していきたい。

2. 母子の基本属性とママ友要素との関連について

さらに母子の基本属性と、ママ友要素とがどのように関連しているのかを検討した結果、子どもの年齢が高い母親ほどママ友を有しており、ママ友の人数も多くなることが示唆された。一方で子どもの性別はママ友要素と関連しなかった。子どもの人数や出生順位について、子どもの人数が多い場合の方がママ友を有している可能性が高く、子どもの人数が多いほどママ友の人数が多くなることが明らかにされた。加えて、子の出生順が遅い場合の方がママ友を得ている可能性が高いことも明らかにされた。子どもの年齢が高いことや出生順位が遅いこと、子どもの人数が多いことがママ友の有無や人数と関連することは、単純にママ友をつくる機会の差によるものと考えられ、妥当な結果であると考えられる。一方で、子の性別がママ友要素と関連しなかったが、子ども同士が同性同士で遊ぶ機会が増える小学生以上の段階と、未就学児、とりわけ乳児の段階とでは異なる結果が得られることも考えられるため、今後検討の余地があるであろう。また、今回回答対象とした子どもの他の兄弟姉妹関係において、男児や女児がいる場合と、すべての子どもが男児あるいは女児の場合では異なる可能

性も想定されるため、これらの要因を含めて今後検証する意義があると考えられる。

また、子どもが幼稚園に通っている母親の方がママ友を得ていることが多いことが示され、これは先行研究（實川，2012）と一致する結果であった。一方で幼稚園の母親よりも保育園の母親の方がママ友を必要としており、ママ友付き合いを継続させたいと感じていることが示唆された。加えて子どもの園が公立であるか私立であるかについても検討した結果、公立の園に子どもが通う母親の方が私立の園に子どもが通う母親よりママ友を必要だと感じており、今後もママ友関係を続けたいと感じていた。これらは幼稚園と保育園、また公立・私立の園におけるママ友関係の特質であると考えられ、顔を合わす頻度の少ない保育園の母親の方が、程よい距離感のママ友関係を形成しているのではないかと考えられる。加えて幼稚園に通っている母親の方が保育園に通っている母親よりもママ友を多く有していることを加味すると、保育園に通っている母親は数少ないママ友関係を貴重な存在と捉える一方で、幼稚園の母親はママ友との関係を簡単に得られるものと捉えているのかもしれない。また私立の園を選ぶ母親と公立の園を選ぶ母親との差異について、公立の園に通う母親の方がママ友を必要だと感じ、関係を続けたいと考えていた。これについては、母親の子どもへの教育観を含めて検証していく必要があると考えられる。

さらに世帯年収や居住地といった世帯の属性とママ友要素との関連について検討した結果、ママ友がいる母親群の方が、ママ友がいない母親群よりも世帯年収の平均値が高いことが示唆された。また居住地が父母どちらもの出身地であるときにママ友を得られている場合が多く、居住地がどちらの出身地でもないとき、ママ友がいない場合が多いことも明らかにされた。一方で、居住地要素はママ友との関係の良好さとは関連を示さなかった。世帯年収との関連については、世帯年収が高い家庭の方が習い事や有料のイベントなどに参加しやすく、ママ友をつくる機会が増えるためではないかと考えられる。居住地については、元々の知り合いや友人がママ友関係へと移行していったり、住み慣れた土地であるということから外へ出かけるハードルが下がることで、出会いの機会が増えるためではないかと推察され、妥当な結果であると考えられる。一方でママ友との関係性と居住地の要素とは関連がなかったことから、元々の知り合いであるかどうかという点に焦点を当てた、より詳細な検討が必要であるかもしれない。

最後に、子ども同士の関係性や親子同士が会う頻度といった、ママ友親子とのかかわり方とママ友関係との関連について検討を行った。その結果、子ども同士の仲が良いほど母親はママ友に嫌われるのを恐れることが示唆された。一方で親子が会っている頻度はママ友関係と関連を示さず、親子同士が頻繁に会っているからといって、必ずしも良好な関係性が築かれているとは限らないことが明らかにされた。子ども同士の仲が良いことで、母親自身が相手のママ友と関係がこじれた場合、子ども同士の関係性へと影響を及ぼすことを恐れているためではないかと考えられる。先行研究においても、子ども同士の関係性と母親同士の関係

性とが並行することがママ友関係の関係を難しくしていることが指摘されていたが（實川・砂上，2009；藤井，2016），本研究でも同様の知見が得られた。

以上のように，本研究ではママ友に関する予備的研究として，母子の基本情報やママ友概念に関する有用な知見を得た。さらに上述してきたような点について，より詳細な検討を行っていくことを今後の展望とする。

付 記

本研究はJSPS 科研費 JP21K13552 の助成を受けたものです。本研究の調査にご協力いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。

引用文献

- Erikson, E.H. (1959). *Identity and the life cycle*. W. W. Norton & Company. (E. H. エリクソン 西平 直・中島由恵 (訳) (2011). *アイデンティティとライフサイクル* 誠心書房)
- 藤井 恭子 (2016). 成人期女性の友人関係におけるヤマアラシ・ジレンマの特徴 教育学研究, 8, 165-171.
- 保坂 亨・岡村 達也 (1992). キャンパス・エンカウンター・グループの意義とその実施上の試案 千葉大学教育学部研究紀要, 1 (40), 113-122.
- 石本 雄真・久川 真帆・齊藤 誠一・上長 然・則定 百合子・日湯 淳子・森口 竜平 (2016). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連 発達心理学研究, 20 (2), 125-133.
- 井梅 由美子 (2024). 小学生の子をもつ母親の育児における困り感についての検討 東京未来大学研究紀要, 18, 15-26.
- 實川 慎子 (2010). 子育て期の母親のネットワークの変遷——母親の捉える「知り合い」と「友だち」に注目して—— 乳幼児教育学研究, 19, 37-47.
- 實川 慎子・砂上 史子 (2009). 子育て期の母親同士の人間関係の特質——母親の自己における「個としての自分」と「親役割を担う自分」に注目して—— 日本保育学会第 62 回大会発表論文集, 327.
- 實川 慎子・砂上 史子 (2013). 母親自身の語りにみる「ママ友」関係の特徴——相手との親しさの違いに注目して—— 保育学研究, 51 (8), 94-104.
- 金子 俊子 (1989). 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究, 3, 10-19.
- 河村 真理子 (2016). LINE のトラブル——幼稚園児のママ友の世界—— 児童心理, 70 (11), 847-851.
- 工藤 遥 (2013). 都市の子育てをめぐるサポートシステム 現代社会学研究, 26, 55-71.
- 松本 一記・吉野 晃平・清水 栄司 (2021). 「ママ友」とのトラブルにより引きこもり・社交不安症を呈した主婦に対する認知行動療法の症例報告 不安症研究, 13 (1), 46-51.
- 宮木 由貴子 (2004). 「ママ友」の友人関係と通信メディアの役割——ケータイ・メール・インターネットが展開する新しい関係—— ライフデザインレポート, 159, 4-15.
- 中山 満子 (2012). ママ友という対人関係についての探索的研究——動機づけ, 構造, 悩みの分析

- 科学研究費補助事業（科学研究費補助金）研究成果報告書（研究種目：基盤研究（C）課題番号：21530656）
- NHK スペシャル取材班（2016）. ママたちが非常事態!? —— 最新科学で読み解くニッポンの子育て —— ポプラ社.
- 大嶽 さと子（2017）. 子育て期における母親同士の友人グループの特徴とその関わり方との関連 名古屋女子大学紀要, 63, 368-379.
- 大峯 花乃子・関屋 伸子・石岡 洋子・濱田 佳代子（2020）. 乳児を持つ母親の孤独感に関連する要因 高知大学看護学会誌, 14（1）, 3-11.
- 塩塚 実奈（2022）. 「ママ友」の交友関係におけるネットワーク形成とその影響 —— 豊島区・新宿区を参考に —— 社会情報研究, 3（2）, 17-38.
- 吉田 弘道・山中 龍宏・巷野 悟郎・太田 百合子・山口 規容子・牛島 廣治（2013）. 育児不安尺度の作成に関する研究 その1 —— 4・5 か月児, および, 10・11 か月児の母親用モデル —— 小児保健研究, 72（5）, 680-689.

注

- 1) 金子（1989）は心理的距離を、「自己が、ある他者との間で、どれほど強く心理的な面でのつながりを持っていると感じ、どれほど強く親密で 理解し合った関係を持っていると感じているかの度合」と定義している。本論文における心理的距離の定義もこれに倣うものとする。
- 2) これまでの乳幼児健診における発達に関する遅れなどの特別な指摘がないこと、及び、幼稚園や保育園などの専門職からの発達に関する遅れなどの特別な指摘がないことを条件とした。なおこれは、発達障害をもつ子どもを育てる母親には固有の悩みが存在することが明らかにされていることから、ママ友関係においても固有の特質を有することが予想されるためである。
- 3) 楽天インサイトによる調査では、不備のある回答は送信できない設定で配信されることから、有効回答率は100%である。また調査地域の偏りがないようにサンプリングされ、目標サンプル数が達成され次第調査は終了となる。なお今回の調査期間は1日であった。
- 4) 認定こども園の場合は、幼稚園を主体とする園であるか、保育園を主体とする園であるかを尋ね、幼稚園を主体とする場合は幼稚園、保育園を主体とする場合は保育園に分類している。